

早瀬光秋先生送別の辞

宮地 信弘

「新入生の皆さん、こんにちは。石原裕次郎です。」これは、早瀬先生が新入生歓迎コンパなどで自己紹介の冒頭によく言われたジョークである。今の若い学生が、タフガイとして知られた往年の大スターにして前の石原東京都知事慎太郎の弟でもあった石原裕次郎を知っているかどうか心もとないところも少しはあったが、学生の間からはクスクスと笑いが起こり、一瞬にして場が和む。私にとってもつい笑いを誘われる一言であった。ことほどさように、早瀬先生はジョークを好まれ、場の緊張を解きほぐすのを得意とされた。特に英語によるジョークの持ちネタは豊富で、いろいろな場でご披露された。最後のパンチラインを効果的にきめるために、そこに至るまでを聞き取りやすい英語で数回繰り返し返されるのが常で、聞く方はどんなオチかを知りたくて懸命に耳を傾け、いきおい英語リスニングに必要な注意力は伸びる。

早瀬先生が三重大学教育学部英語教育講座に赴任されたのは 1990 年 10 月であった。当時、英語教育講座は大学院設立に向けて努力していた時期で、確実に文科省の審査に通る優秀な人材をとということで早瀬先生に白羽の矢が立った。着任以来、先生は英語科教育法を中心とした科目を担当され、将来中高の英語教師となる学生の教育と育成に当たられた。

先生の授業はほとんどすべて英語で（当然、お得意のジョークも交えて）行われ、英語を教える教員が身を持って英語を使うという理想的な授業形態を早くから取り入れられた。また、インターネットを通してアメリカの大学と三重大学をつないで行う遠隔授業を日本の他の大学に先駆けて実践された。アメリカの学生は日本語専攻生でこちらは英語専攻生、互いの学生生活や文化の相違などをトピックに意見交換するという、学生にとっては緊張しつつも楽しい実践的授業形態であった。今ほど通信環境が整っていなかった当時は機器のトラ

ブルも起こり、時に電話回線が途切れたり、随分ご苦労もあったと聞く。その後、遠隔授業はアメリカの大学のみならず、外国語として英語を学ぶスペインの大学との間にも開設され、多くの学生が参加し、同世代の学生と日本語と英語でコミュニケーションする喜びを味わった。

英語教育をご専門とされている関係上、先生は、毎年多くの学生が教育実習に赴く附属中学校とのパイプ役を積極的に果たされた他、そのご活躍は三重県内にとどまらず、中部地区英語教育学会会長や全国英語教育学会副会長等を歴任され、広く英語教育界の発展に多大の貢献をしてこられた。

また、先生は長い間教育学部の国際交流委員会委員長として学部の国際交流を大きく進展されただけでなく、全学の国際交流をも大きく前進させられた。現在も続いている米国ノースカロライナ大学ウィルミントン校 (University of North Carolina Wilmington) との大学間協定も先生のお力で実現し、その後少なからぬ三重大生が交換留学生として UNCW で学び、UNCW から留学生を迎えることになった。中国の天津師範大学との学部間協定も先生が国際交流委員長の時に締結され、その後ほぼ毎年語学文化研修が実施され、中国との国際交流が密になった。そのおかげで私なども数回天津師範大学を訪れる機会を得た。

このようにあらためて先生の教育学部および三重大学における国際交流に関する業績を書いていくと、その小柄なお姿からは想像もできない行動力に圧倒される思いに駆られる。先生のその行動力の根底にはずば抜けた英語力と生来のコミュニケーション力があると思う。私が知っている限り先生の英語力は、単に会話ができるというレベルではなく、英米人と対等に交渉できる英語力である。こうした英語力はなまなかに身につくものではない。先生は関西外大の時に第1回交換留学生として米国アーカンソー大学に留学されているが、それだけで身につくものではないだろう。日頃の研鑽が欠かせないはずである。実際、先生の研究室の前を通るとよく英語ニュースが漏れ聞こえてくることが多かったし、大学に来られるときも iPod やスマートフォンで英語ニュースをイヤホンで聞かれている姿をよくお見かけした。また、英語リスニング能力を高

めるサイトを学生に紹介されることも多かった。UNCW の学生に三重大学留学をアピールするために UNCW 訪問をご一緒させていただいたことがあるが、空港まで行く帰りのタクシーの中で運転手と気軽に会話されるのには正直感心した。早口で癖のある地元の運転手の英語は私にはほんのごく一部しかわからず、受け答えなどとてもできなかったのに、早瀬先生はまるで世間話に興じる隣人のように笑いを交えて会話を楽しまれていた。先生の英語力と積極性はやはり真似できないという思いをつくづくと味わった。

先生は、英語に限らず、スペイン語もご堪能であった。先生は 20 年以上に渡って津市中央公民館スペイン語講座をご担当されており、そのスペイン語力は折り紙付きである。スペイン料理の店で会が持たれるときなど先生のスペイン語の知識の一端に触れることも多かった。「日本語のアホというのはスペイン語では豚肉という意味なんですよ。では、バカは何かわかりますか」などスペイン語の面白さの一端をご披露された。スペイン語は関西外大の時に、単位はいらないから聴講させてほしいと言って授業を受けて習得されたそうだ（英語教員になりたいがために単位を取る今の学生とは動機づけと意気込みが全く違う）。アーカンソー大学留学時には、英語ではアメリカ人になれないが、スペイン語ではアメリカ人の鼻を明かしてやったという（日本人としては胸のすく）エピソードも伺ったことがある。

こうした語学力に積極的なコミュニケーション力と、味付けとしてジョークのスパイスが加わるのだから、まさに鬼に金棒とはこのことで、先生が関わられた三重大学の国際交流が大きく発展したのも宜なるかなと思う。

気さくなお人柄で、独自のユーモア感覚をお持ちの先生には公私にわたり大変お世話になったし、教えられることも実に多かった。退職されるのは残念でしかたがないが、これまでのお付き合いに深く感謝申し上げたいと思う。